

盤龍鏡の諸系列

The Lines of *Pan Long Jing* Mirrors

上野祥史

- ① 盤龍鏡とこれまでの歩み
- ② 盤龍鏡の主文と型式分類
- ③ 単位文様と分布の検討
- ④ 系列の抽出と盤龍鏡の製作動向

まとめ

【論文要旨】

漢鏡については、各鏡式ごとに系列を整理し、鏡式を超えて共通する系列を束ねることによって漢鏡の製作系譜を抽出でき、その動向に迫ることができると考えている。今回は、後漢前中期に製作された、盤龍鏡に注目した。盤龍鏡の系列を整理し、系列の消長から盤龍鏡の製作動向、ひいては後漢鏡の製作動向を考察しようというのが、本稿の目的である。

まず、獣像の表現とその配置の組合せによって盤龍鏡を型式分類し、型式ごとの銘文・作鏡者銘・分布状況などを検討した。そこには型式ごとの特徴がみられ、型式から幾つかの系列を抽出することができた。系列には分布がかなり広範囲に及ぶ「広域型」と分布が一地域に限定される「狭域型」という二つのタイプが存在した。「広域型」には龍氏系・西方青蓋系・東方青蓋系・三羊系・尚方系があり、「狭域型」には三輔系・西域系がある。

そして、整理した盤龍鏡の系列と、既に分析の進んでいる画像鏡などの諸系列との関係を考察した。銘文や作鏡者銘や分布域の類似性などから、龍氏系と三羊系は、それぞれ画像鏡の龍氏系と三羊系に密接に関係することを指摘した。また、西方青蓋系と画像鏡の尚方青蓋系について、両者の間には相違点があるものの、共通点も少なくなく、何らかの関係があったことを想定することができた。これらは、作鏡系譜を復原してゆく上での大きな手がかりであると考えられる。

最後に、青蓋について検討した。その結果、青蓋とは益州北部で生産活動を展開していた製作者集団であることを確認し、西方青蓋系や東方青蓋系とは、その青蓋が各地の工人・製作者集団を管理することで形成された系列であると推察した。